

J. C. クマラッパ (Kumarappa) の宗教的経済学

葛 西 実

I 問題の所在

E. F. シュマッハー(Schumacher)の *Small is Beautiful*⁽¹⁾ は、インドの知識人の間では広く読まれている。昨年の10月にインド版の第一版、第二版が今年の1月、第三版が6月にでている。恐らく、これはインドにおける行き詰まりからくる危機意識の一つの反映であろう。

皮肉なことには、悲劇的なことであるが、1973年に初版がでたシュマッハーの *Small is Beautiful* の所説は内容的に見てゆくと、1915年以来、1948年1月30日の暗殺される日迄、民族運動の嵐の中で一貫してM. ガンディーが主張したことに重なるところが多い。シュマッハーはこのことを十分に意識している。これが特に明確にされているのは、宗教的経済学的重要性を指摘した“Buddhist Economics”⁽²⁾である。シュマッハーを通して、忘れられ否定されたM. ガンディーが再確認されることであろう。ところがインドの知識人の間では、ガンディーを忘れ否定したという意識は少ない。たとえば、インドの最も代表的な経済学者の一人であるA. K. セン(Sen)——かつてデリー大学の経済学教授で、現在はオックスフォード大学で経済学を講じている——は、ガンディーの目的は独立後のインドでは依然として尊重され、インドの計画経済にも生かされているが、その手段は拒否されたという⁽³⁾。ガンディーにとって目的と手段とは不可分で緊密な関係にあり、手段の否定は目的の否定につながる 것이意識されていないのである。このことはインド特有の問題ではないと思われるが、インドの現実では構造的とっていいほどに際立っているので

はななかなうか。

インドの著名な政治学者であるJ. D. セテイー(Sethi)は、このことを痛烈に意識している例外的な人である。セテイーはインディラ・ガンディー(Indira Gandhi)の非常事態宣言に反対した数少ない学者の一人でもあった。セテイーはガンディーの同志と後継者はガンディーを裏切り、否定し、その結果、インドのエリートの腐敗は極限状況に達し、社会は崩壊の可能性をはらんでいるという。セテイーの最近の著書である⁽⁴⁾*Gandhi Today*の献辞にはガンディーを正確に理解した数少ない人として三人の名をあげている。その中の一人がJ. C. クマラッパーである。

クマラッパーの*Economy of Permanence*とA. K. クーマラスワミイ(Coomaraswamy)の*Art and Swadesh*はシュマツハーによって“*Buddhist Economics*”の重要文献として指摘されている。クーマラスワミイは亡くなる前の最後のインタビューで、西欧のモデルはインドの亡びであり、M. ガンディー、J. C. クマラッパー、C. F. アンドルーズ(Andrews)の道を歩むことをインドに訴えたといわれる。これは、クーマラスワミイがインドにおけるキリスト教の宣教活動にきびしく批判的であったことを考えるならば意外な発言である。アンドルーズは英国国教会に属する宣教師として渡印し、インドでキリスト者として一生を終えた英国人であった。クマラッパーも熱心なキリスト者であり、キリストに従って生きることが一生の念願であった。両者に共通することは、英国のインド支配と利害関係の一つにしていた当時の教会にとっては異端者であったことである。文献で見るとクーマラスワミイは、これら三人のインドの指標と親交の関係にあった形跡はないし、クマラッパーとは会ったこともないが、恐らく思想的に共通するところがあったのであろう。シュマツハーはそれを読みとっている。

クマラッパーは忘れられた人である。これは理解に苦しむことである。ガンディーと結びついた民族解放運動は、インドの近代史において中心的な出来事の一つであったことは誰も否定することは出来ない。その運動

の基礎の一つとしての全インド農村産業協会 (All India Village Industries Association)の責任者で、ガンディーの経済思想を正確に、体系的に構成した学者としてガンディーの絶対的信頼を受け、ガンディーの生存中にガンディー経済学者としての權威を認められ、しかもガンディーの身近かでガンディーと行動を共にしたクマラッパは、ガンディーの経済・政治・教育観、特に経済観を理解する場合避けることの出来ない人である。しかし学問の世界でも、これは殆ど意識されていない。そういう状況で、経済学者としてのシュマッハーがクマラッパの経済思想の重要性を指摘し、セテイーがクマラッパをガンディーの正確な理解者の一人として意識していることは、新鮮な驚きであった。しかしセテイーのガンディーの経済観の解釈では、クマラッパに言及したところはない。これは不思議なことである。事実、クマラッパの視点からは、セテイーの理解は再検討をせまられるであろう。

この小論は、クマラッパ研究の一つのささやかな発端になるかもしれない。それほどクマラッパはインド知識人の問題意識の外にあって、忘れられた人である。しかしガンディーがインドに生きているかぎり、ガンディーの経済思想を正確に、体系的に述べ、しかもその実現の為に献身した人として、クマラッパは問題にされざるをえないであろう。

インド民族運動の中核に、クマラッパのようなキリストの証人がいたことは驚くべきことである。独立後は、国民会議派の経済政策を今日のインドを予測して、真向から批判し、インドの農村運動に献身したクマラッパの証をインドのキリスト教史は意識していない。インドにおけるキリスト教史にC. F. アンドルーズは言及されているが、クマラッパのそれは皆無であるといつてよいほどである。インド教会の指導者の中には、クマラッパの存在を知らない人もいる。これはインドキリスト教会の歴史的性質(体質)の故なのであろうか。

この小論は二つの部分からなる。一つはクマラッパの生涯のスケッチであり、他はその経済学のあらすじである。クマラッパの全貌は資料

が限定されているので、今後の研究に待つ以外にはない。

注

- (1) E. F. Schumacher, *Small is Beautiful*, New Dehli, Rādhā Krishnā, 1978.
- (2) *Ibid.* pp. 48~68.
- (3) A. K. Sen, "Planning" in *Change and Conflict in India*, edited by Romesh Thapan, Dehli, Macmillan, 1978, pp. 130~136.
- (4) J. C. Sethi, *Gandhi Today*, New Dehli, Vikas, 1978.

II 「真理の御霊の御導きにしがって」

—— J.C. クマラッパの生涯 ——

文献としてまとめたものは、M. ヴィナイク (Vinaik) によるもの以外にはない。ヴィナイクは、クマラッパの指導の下に、クマラッパの身近にあって農村運動に20年以上にわたって従事した人である。クマラッパの生存中にこれを書き上げ、クマラッパを初め、クマラッパの兄弟、知人がそれを読み、批判し訂正する機会があったので、内容的には信頼出来るのではないと思われる。以下主としてヴィナイクの資料を通してクマラッパの生涯をたどってみたい。⁽¹⁾

クマラッパは、1892年1月4日、タミルナード(Tamil Nadu)州のタンジョール(Tanjore)に生まれた。両親は敬虔なキリスト者で、英国国教会に属し、父親の S. D. コルネエリス (Cornelius) は、当時のマドラス州政府の公共土木事業課 (Public Works Department) の官吏であった。9番目の子で、ジョセフと名づけられた。宗教的な面では母親の影響を強く受けたことを、最後の刑務所生活(1943~45)での著作の一つである *Practice and Precepts of Jesus*⁽²⁾ の序文に述べている。母親は南インドの敬虔なキリスト教の伝統的な家庭で育てられ、大学教育は受けていないが、タミル語で広く読書に親しみ、きわめて質素な生活の中で、イエスの教えに忠実に生きようと努めていた。特に困った人々を何かと助ける良き隣人であった。このことが幼少時代のクマラッパに非常に深い影響を与えている。子供の頃から、市場に連れて行かれ、そこ

で鶏・七面鳥・家鴨を買い、養うことをすすめられた。そしてその卵を市場で売り、その売り上げを利益として記録することを教えられ、月末には、利益は献金として慈善事業に寄附することになっていた。たとえば、それが孤児院の一人の孤児を支える為に用いられたことなどは、一つの忘れ難い印象として残っているようである。このような習慣は一貫して続けられ、ボンベイで公認会計士として働いている時期も、月初めには必ず献金の要求があり、それは月収入の10分の1をはるかに上回るものであった。キリスト教の精神は、この母親、日曜学校、そして日々の家庭の祈りで教えられたという。父親は寡黙の人であったが、しつげがきびしく、朝の5時には子供達を起こし、身の回りを整え、清潔にし、生活を時間にしたがって配分し、合理的に生活することを教え、12人の子供すべてに、その土地の最上の学校で学ぶ機会を与えた。その中の二人は少年時代、一人は結婚後亡くなっている。残された9人は1956年の段階では、それぞれ社会人として重要な役割を果たしていた。父方の祖父は教会の牧師であった。

ロンドンで公認会計士(F.S.A.A.)の資格をとり、ロンドンで1917年から、ボンベイで1919年から公認会計士として働き、非常に成功していたといわれる。1927年、長兄のすすめにより渡米し、シラキュース大学で経営学を学び、1928年に同大学から経営学士、さらにコロンビア大学で財政学を学び、修士号を与えられた。コロンビア時代に“インドは何故貧しいのか”という問に捉えられ、主任教授であったE.R.A.セリグマン(Seligman)教授のすすめにより財政学の立場から見たインドの貧困の原因についての修論を提出した。この研究を通して、英国支配の不正とインド搾取の実態を認識し、民族主義者として自覚することになった。ここでコルネエリスという名字をキリスト教への回心以前の名字であったクマラッパに変えた。

1929年に帰国し、ボンベイで、以前と同様に公認会計士として働いた。したがって外面的には姓が変わっただけである。帰国後間もなく、修論の

出版をすすめられ、M.ガンディーがその助力をしてくれる可能性があることを教えられた。クマラッパーは、ガンディーをアーメダバド(Ahmedabad)のサバルマティ(Sabarmati)アシュラムに訪ねたが、その出会いは風変わりであった。当時流行の絹の背広を身につけていたクマラッパーには、アシュラムの雰囲気はあまりに異質であった。扇風機もないアシュラムの客室は、じっとしておられないほどに暑く河岸にでかけ、そこで約束の時間迄待つことにした。約束の時間の10分前にそこを去って約束の場所に向かって歩きだしたところ、河岸に近い木陰で糸を紡いでいる老人がいたので、数分間たちどまって老人の仕事を見ていた。ところが約束の時間の5分前になると、この老人はほとんど歯のない口を開いて、ほほえみながらクマラッパーではないかと尋ねる。その瞬間クマラッパーはこの老人がガンディーであることを直感し、それを確認し、大地に坐った。ガンディーはクマラッパーの修論をガンディーの機関誌 *Young India* に連続的に掲載することをすすめる。これはのちほどまとめられ、*Public Finance and Our Poverty*⁽³⁾という表題で出版され、インドでは広く読まれることになった。ガンディーは一面識もなかったクマラッパーに、この時グジュラート州の農村調査を依頼する。クマラッパーはグジュラート語ができないので無理であるということを述べると、即座にガンディーはグジュラート民族大学の経済学科の全員が協力するという。そしてこの件について、その大学の学長であるカーカー・カレエルカアル(Kaka Kalelkar)に面会することを求められた。その足で直ちにK.カレエルカアルに会ったところ、K.カレエルカアルはクマラッパーはあまりに西欧的であるという印象を受け、それに現地の言葉であるグジュラート語が出来ないので、この課題には不適であると判断して、ガンディーの依頼を引き受けないようにすすめた。クマラッパーはボンベイに帰って、その旨をガンディーに伝えたと、時を移さずK.カレエルカアルからガンディーの要請を引き受けるようにという手紙が来た。ガンディーの働きが背後にあったのであろう。それにしても

これはガンディーの洞察の鋭さを物語る。ガンディーの判断に誤りはなく、クマラッパールはガンディーの運動の強力・忠実な核を構成する一人となった。

クマラッパールが農村に入りこんで調査に従事している時、ガンディーは全インドを覚醒した1930年のダンディへの巡礼の旅(塩の行進)にでかけた。その頃、クマラッパールの修論は *Young India* に“Public Finance and Our Poverty”と題して連続して掲載されていた。ガンディーは巡礼の途次の宿泊所であるカラディ (Karadi) にクマラッパールを招き、そこで一冊の本として出版される予定の“Public Finance and Our Poverty”の序言を書き、自分が逮捕された後にマハデブ・デサイ (Mahadev Desai) と協力して *Young India* の編集・出版の責任をとることを要請した。結果的には、M.デサイも逮捕されたので、クマラッパールが実質的には責任をになうことになった。

1929年代からクマラッパールは、ガンディーの70巻からなる著述集に継続して登場してくる。ガンディーのクマラッパールに対するどの手紙をとりあげても、ガンディーのクマラッパールに対する全幅の信頼がにじみでている。ガンディーはクマラッパールの祖国愛、真理愛(キリスト教)を驚きの目をもって見ており、賛嘆を惜しまない。クマラッパールの兄弟は紹介を必要としないほど若くして一様に頭が禿げているのに驚き、同時に一様に高貴な精神を具えていることにうたれている。⁽⁴⁾ 1931年の第二次円卓会議で渡英中、ガンディーは若いインド人留学生の集会で、クマラッパールにならうようにとすすめている。⁽⁵⁾

1930年に、クマラッパールはガンディーの要請に応じて、グジュラート民族大学の2人の教授と9人の学生の協力で農村調査をおこなっている。これがのちほど *An Economic Survey of Matar Taluka* として出版されたが、この調査を通して農村の極限的貧困状況と英国支配がこの改善に努めるのでなく、逆に重税を課して貧困化をすすめている実態が明きらかにされ、インドの現実調査の一つのすぐれた具体的例として広く読ま

れた。

1931年2月3日に、*Young India*の編集者としての責任を問われて逮捕され、2月25日に法廷に出頭し、自分の立場を述べた。その際、傍聴者によれば、治安判事はクマラッパを正視しないで、手で頭を支えながら聞いていたということである。クマラッパは次のように弁明する。ここで裁かれる理由は治安判事によれば*Young India*で合理的政府に対して反逆を扇動したことであるが、これが正当であれば自分は祖国に対する反逆者ということになる。しかしインド政府は専制的であり、英国議会によって制定され、英国議会は英国人民の意志を代表している。したがってインド政府が合法的に機能出来るのは英国内であって、インドではない。しかもこの非合法的政府が非暴力を原則とする婦女子を含めたインド人の正当性主張の行進をラテイで追いちらしている。かかる政府がどうしてインド人の忠誠を要求することが出来るであろうか。この法廷の治安判事はかかる体制の一つの手先にすぎない。したがって自分に対して裁判権はない。本来ならばこのような法廷の茶番劇に参加する理由はない。しかしながらこの法廷で反逆罪を問われることは自分にとって望ましいことである。それはインド人を現実に覚醒させる一つの警告の叫びになり、インド人のただ中の盗賊を指摘することになり、これは市民としての義務である。ここでクマラッパは治安判事(インド人)にインド人の血をしばらくとっている政府の一端をになうのではなく、インド人のうめき声を聞き、インド人の要求に応じて職を辞することをすすめる。この法廷で1年と6か月の判決を受けた。これはクマラッパの最初の刑務所生活となる。1928年迄、英国支配の正当性に疑いをもたなかったクマラッパにとっては、これは一つの決定的変化であった。ガンディーは出獄後、クマラッパの弁明を読んで非常に感動している。

しかし「ガンディー・アーウィン協定」(The Gandhi-Irwin Pact)の結果、クマラッパは3月に釈放される。3月末のカラチにおける国民会議派大会で、クマラッパを議長とする特別委員会が設定され、2か

月以内にインド・英国間における財政的貸借関係を歴史的に明らかにすることを要求される。逮捕の危険にさらされながら4人で構成された特別委員会はその要請に応じて、期限内にその報告書を提出する。この報告書は後程、*The Financial Obligation between Great Britain and India*⁽⁷⁾として出版される。この報告書は、ガンディーによって第二次円卓会議に提出され、大変な論議を招き、その結果ロンドンの株式市場にも影響を与えたといわれる。その報告書が結論として主張していることは、英国のインド支配の歴史は経済的視点から見れば搾取の歴史であり、インドの一切の債務は当然のことではあるが英国政府が負うべきであるということである。

ガンディーとM.デサイが第二次円卓会議でインドを留守にしている間、クマラッパは*Young India*の編集の責任を再びとったが、このことが理由で2年と6か月の判決を受け、投獄された。これが第二回目の獄中生活となる。1934年に出獄しているが、休む間もなく、ビハール大地震の被災者救援委員会の会計監査になることを要請され、それを引き受けることになった。インド各地から毎日のようによせられる義捐金・義捐物の厳密・公正な処理は容易ではなく、この誤まりは、たとえそれが些細なことであっても、国民会議派の信義を問われる問題であったが、クマラッパとクマラッパの下で働いた奉仕者のグループは見事にこの困難な課題をなしとげ、救援委員会委員長ラジェンドラ・プラサド(Rajendra Prasad)はクマラッパに対して賛辞を惜しまなかった⁽⁸⁾。クマラッパの厳格・厳密・公正さについては批判の余地はなく、クマラッパの課題への献身は、公的な事実となった。

1934年10月27日、ボンベイにおける国民会議派大会はスワラジ(swaraj)・スワデーシ(swadesh)を目的として、その下部団体の一つとして全インド農村産業協会(The All India Village Industries Association)をガンディー指導の下に、クマラッパが創設・運営することを決議した。同年の12月14日、A.I.V.I.A.は、ガンディーを会長とし、クマラ

ッパーを実際の責任者として正式に発足した。これは地道な運動であったが、インド独立の為には必須不可欠であることをガンディー、クマラッパーを中心とした協会員は意識していた。この運動の過程を通して、ガンディーによって方向づけられ、クマラッパーによって体系化された非暴力・平和(アヒムサ)、永遠(Permanence)の経済学が誕生した。A. I. V. I. A. の月刊機関誌である*Gram Udyog Patrika* がその成果の跡を残している。クマラッパーの*Why the Village Movement*⁽⁹⁾はA. I. V. I. A. の哲学・経済観を含めて、その創設・展開の過程を示している。この運動の本部はワルダ(Wardha)にあるが、その入口と建物との間の象徴的な場に、十字架からおろされて横たわるイエスとそれを見つめる悲しみにうたれた三人の女性の石像がある。十字架の精神、一切の所有、必要とあらば生命を農村の再生の為に捧げる、これがA. I. V. I. A. の基本的精神であり、クマラッパーが率先してこの精神に生きた。

独立の為の政治的闘争の過程で、A. I. V. I. A. は、その土台の一つとして重要な意味をもって来る。国民会議派が1937～1939年、州政府に参加した時期には、その政策の方向づけに大きな影響を与えている。この時期に、中央州(The Central Provinces)と北西辺境州(The N.W.F.P.)の依頼に応じて大規模な調査を行い、科学的視点から農村が犯罪的とっていいほどに、無視され悲惨な状況にあることを指摘する。この調査は後ほど*Report of the Industrial Survey Committee of C.P. and Berar*⁽¹⁰⁾、*A Plan for the Economic Development of N.W.F. Province*⁽¹¹⁾として出版される。

1938年、当時のインド国民会議派の議長であったスパーシュ・ボース(Subhas Bose)によってJ. ネルーを議長とした国家計画委員会(National Planning Committee)がつくられ、クマラッパーは一人の委員として招かれた。しかしクマラッパーは、農村産業の土台づくりで時間の余裕がないという理由で断わったが、ガンディーの説得——背後にはネルーの強い希望があったが——で委員会に参加した。しかし3か月に

して、大企業の経営者、資本家、大商人も含めた委員会とは根本的に立場が異なることが明確になり、ガンディーの承諾の下に委員会を辞した。これが恐らく、クマラッパの立場がネルーによって代表される国民会議派の経済政策と相容れないことが公的に明確になった最初の時であつたろう。以後、クマラッパは国民会議派を代表する経済学者ではなく、ガンディー経済学者と知られるようになる。外国の援助によらない、農村を基盤にした、農民に働く機会を与える計画経済は、ネルーによって代表される国民会議派によって明確に拒否されたのである。ガンディーはクマラッパの立場にたっており、国民会議派は経済政策の面で、実質的にはガンディーの立場を受け入れていないのである。

1939年9月、第二次世界大戦が始まると英国の帝国主義的支配は、その実態を露骨に表わしてくる。農民はインフレーションで惨たんたる状況におかれた。クマラッパはこの状況に黙していることが出来ず、*Gram Udyog Patrika* (1942年、12月)で、“A Stone for Bread”と題して、英国のインフレーション政策——紙幣の濫発による民衆からの不正利得、略奪——を糾弾する。このような状況で、自己防御の為に農産物を売らないように農民にすすめ、商人も買弁的役割ではなく、民衆を守るような役割を果たすことを要求した。¹² クマラッパはこの記事の為に逮捕され、2年と6か月の判決を受けた。法廷で治安判事が、農民がクマラッパの忠告を守っているならば、結果はどうなったであろうかという主旨の事をクマラッパに問うと、クマラッパは、ベンガル農民300万人は餓死しなかったであろうと答えたという。この法廷論争の一部が*Currency Inflation: Its Cause and Cure*¹³として出版されたが、直ちに禁書となった。

クマラッパの健康は2年の刑期を過ぎると急激に悪化し、このままではいつ死んでも不思議ではないという状態になった。両手・両足は青くはれあがり、消化が悪いので、流動物で栄養をとり、床についたままであった。刑務所の二人の医者は政府に釈放をすすめ、政府はそれに応じ、

1945年2月1日、クマラッパーは姉にひきとられた。ガンディーは、クマラッパーの病状についての情報から、この人生では会えないものと覚悟していた。既に同じ収容所で、陰のようにつきそってきたカストルバー(Kasturba)と右腕のように働いた、M.デサイが亡くなっていた。クマラッパーは数週間のうちに回復して、ガンディーをセーヴァーグラーム・アーシュラム(Sevagram Ashram)に訪ねたが、ガンディーは最初は識別出来ず、非常に近づいて初めてクマラッパーであることが分かった。その時、クマラッパーは詐欺師だ、刑務所の医者をごまかしたといってガンディーは大変喜んだといわれている。この最後の刑務所生活中、クマラッパーは、*Practice and Precept of Jesus*¹¹⁰と*The Economy of Permanence*¹¹¹を書きあげた。ガンディーはこれら二つの著述に目を通して序文を書き、特に前者の序文は長いが、クマラッパーの当惑にもかかわらず、グジュラート民族大学総長として二つの博士号——神学と農村産業——をクマラッパーに与え、その後クマラッパーをクマラッパー博士と呼ぶようになる。

独立後、クマラッパーはガンディーに、独立運動の過程を通してガンディーの指導の下に創設された民衆の為のさまざまな運動を総結集してロク・セヴァク・サンガ(Lok Sevak Sangh)として強力に民衆の為の運動を展開することを提案した。ガンディーはこの必要性を認めて、1948年2月2日にガンディーのセーヴァーグラーム・アーシュラムで、その為の集会を開くことを提案し、クマラッパーにこの集会を召集することを要請した。ガンディーは政治的権力の座についた国民会議派に真のスワラージを期待できず、草の根の地道な全国的運動、民衆の運動にインドの将来の可能性を見たことは明きらかである。クマラッパーは、この点、ガンディーと全く同一で、むしろ経済学者としてこの現実を早くから見ていたようである。しかしガンディーは1948年1月30日に暗殺された。予定より大幅におくれて集会は開かれたが、ガンディーのカリスマなしには、統一への同意には達しなかった。

1948年2月、国民会議派はクマラッパを議長とする農業改革委員会 (Agrarian Reform Committee) を任命したが、その課題は農業と農村の実状を調査し、改革への提案を提起することであった。委員会は全国各地を訪ね、精力的に行動し、報告書を1949年に提出したが、その内容は、あまりにラディカルなので、国民会議派、政府にも受容されなかった。クマラッパは、A. I. V. I. A. の責任者として、インドの農村を地道に歩き、調査し、そしてその日常生活を熟知していたので、その根深い問題を解決する為に急進的な提案をしたのであろう。これが、*Report of the Congress Agrarian Reforms Committee*¹¹⁹として出版されると、大新聞によってきびしく批判された。その提案のいくつかを例示するならば、何故それが支配階層に不評であったか明きらかになるであろう。第一に、農地の私有制を廃止すべきである。第二に、農村共同体が土地を管理し、耕作者は労働の正当な結果を享受すべきである。第三に、産業部門の最低賃金は、農業経済との同一水準で決定されるべきである。

独立後の国民会議派政府に対して、クマラッパは批判的であった。これが、ガンディー指導の下に、きびしい独立運動、農村運動を展開してきた結果であることに堪えられなかったのであろう。自由・独立は農村では現実ではなかった。いわゆる独立において起ったことは、権力の座が英国からインドに移っただけで、支配構造、官僚制は英国支配の遺産として、むしろ強化されて温存された。国民会議派は民衆を裏切ったのである。このような批判を主として *Gram Udyog Patrika* を通して展開したが、そのいくつかをとりあげてみたい。1948年、10月には、現状の分析をして、状況に変化がないどころか、悪化のきざしがあり、農民は飢餓状況にある。中央政府も、州政府も、ガンディーを国父としながら、その思想を、理想を拒否している。1949年、6月には、独立が権力の委譲にすぎなかったことを端的に示している支配者の英国的高度の生活水準を、公費の浪費であるとして痛烈に批判する。ネルーをその

焦点にしているが、ガンディー亡き後、ネルーの魅惑に捉えられていた当時のインドでは不評であった。独立後、委譲された権力構造の中で少しでも多く利益を獲得しようとしている全体的傾向のなかで、これを批判することは容易なことではなかった。

1953年、高血圧の理由で公的・行政面の責任から退いて、マドウライ地方のカアルパティ (Kallupatti) にあるガンディー・ニイケタン・アシュラム (Gandhi-Niketan Ashrama) で晩年を過した。このアシュラムは、タミルナード州 (Tamil Nadu) の農村再生運動者の中心村で、ここは各地の農村産業振興運動者の出会いの場であり、各地の若い人々が訓練を受ける場であった。クマラッパは、このような農村の指導者、若い人々との交りのうちにその残る一生を過し、1960年1月30日に亡くなった。

クマラッパの *Practice and Precepts of Jesus* はクマラッパの生き方を根本的に規定している意味を明らかにしている。それは真理の御霊に導かれて、キリストに従って生きてゆくことである。現実においては、自分の経験に照らして、信仰者の歩みは、大海におかれた小船のようなものであり、羅針盤の御霊の導きに従って、舵をしっかりと定めて航海することである。働きが異なるから、一見異なった方向に行っているようであるが、信仰者の到達点の一つである。共通していることは、己れを捨てて十字架を背負うことである。具体的には、ガンディーの運動の過中に生きれば生きるほど、少年時代母親の膝元で教えられたイエスの教えが、この地上生活においても生きて^{ひとくち}いることに目を開かれたという。クマラッパのキリスト教は一口に言えば、持てる一切のものを貧しき人に与え、十字架を背負い、キリストに従うことであった。

クマラッパは、ガンディーの運動に身を投じて以来、サンニャーシイのような生活をした。これはクマラッパのワルダの住居を一見するだけで明らかである。収入は20分の1以下となった。心情的、抽象的、或は扇動的に農民の貧困からの解放を主張する都会的、政治的運動とは一線を画して、実際に農村に入りこみ、具体的に調査をし、その結果ど

のように改善すべきかを検討し、そしてその為に努力しているのである。そのような過程の中から、クマラッパの腐敗構造に対して歯に衣着せないきびしい批判が生まれたのである。それにしても、独立後のクマラッパの敷地16平方メートルで一間の泥づくりの家とネルーを初めとする国民会議派指導者層のデリー、諸都市における大邸宅——かつての英国支配の象徴——との対比は、一体何を物語るのだろうか。

注

- (1) M. Vinaik, *J. C. Kumarappa and His Quest for World Peace*, Ahmedabad, Navajivan, 1956.
クマラッパを理解する為には次の文献は絶対に必要であるが絶版で、手に入らないのは残念である。その中にクマラッパの伝記的なものも含まれている。S. K. George and G. Ramchandran, edited, *The Economics of Peace*, Maganradi-Wardha, Akil Bharat Sarva Seva Sangh, 1952.
J. C. Kumarappa, *Stone Walls and Iron Bars*, Allahabad, New Literature, 1946. Vinaik の伝記は、年代順に述べられていないので整理する必要がある。
- (2) J. C. Kumarappa, *Practice and Precepts of Jesus*, Ahmedabad, Navajivan, 1945.
- (3) J. C. Kumarappa, *Public Finance and Our Poverty*, Ahmedabad, Navajivan, 1930.
- (4) *The Collected Works of Mahatma Gandhi*, Vols. 61 April 25—September 30, 1935, Dehli, The Public Division of Ministry of Information, Government of India, p.463.
- (5) *Ibid*, Vols 48, pp.183—184.
- (6) J. C. Kumarappa, *An Economic Survey of Matar Taluka*, Wardha, Maganradi, 1947.
- (7) J. C. Kumarappa, edited, *The Financial Obligation between Great Britain and India*, Wardha, Maganradi, 1948.
- (8) Rajendra Prasad, *Autobiography*, New Delhi, Asia Publishing House, 1957, pp.367—368.
- (9) J. C. Kumarappa, *Why the Village Movement?*
Rajghat, Akhil Bharat Sarva Seva Sangh, 1960. 第一版は1936年に出版されている。
- (10) J. C. Kumarappa, edited, *Report of the Industrial Survey Committee of C. P. and Bevar*, Wardha, Maganradi, 1948.
- (11) J. C. Kumarappa, *A Plan for the Economic Development of N. W. F.*

Province, Wardha, Maganradi, 1948.

- (12) J. C. Kumarappa, edited, "A Stone for Bread" in *Gram Udyog Patrika*, December, 1942; J. C. Kumarappa, edited, *Gram Udyog Patrika*, Part I, 1939~1946, Madras, The Kumarappa Memorial Trust, 1971, pp. 303~305.
- (13) J. C. Kumarappa, *Currency Inflation: Its Cause and Cure*, Ahmedabad, Navajivan, 1948.
- (14) J. C. Kumarappa, *Practice and Precepts of Jesus*, Ahmedabad, Navajivan, 1945.
- (15) J. C. Kumarappa, *The Economy of Permanence*, Wardha, Maganradi, 1948.
- (16) J. C. Kumarappa, edited, *Report of the Congress Agrarian Reforms Committee*, New Delhi, The All India Congress Committee, 1949.

Ⅲ クマラッパの経済学

クマラッパの経済学は、以上述べたような背景の中で生まれ、展開したのである。1938年を境界にして、国民会議派を代表する、或は国民的(民族的)経済学者として考えられていたクマラッパが、より正確にガンディー経済学者と理解されるようになった経緯については既に指摘してある。

クマラッパの経済学は、シュマッハーの画きだす宗教的経済学の一つの典型的な例である。貨幣によって計られる富に最高価値を見だし、一切の文化的諸活動もこの基準によって評価する現代世界、現代経済学に対して、宗教的経済学の核には超越的知恵——クマラッパにとってはそれは神である——が象徴的、規範的な現実としてあり、経済的活動、経済学も含めて一切の諸活動はこの核を目指している。より多くの富を、利潤を得る為に競争を原理とした生産の合理化、産業化をはかり、その結果としての自然の破壊、公害、人間の機械化、搾取等の諸問題を経済成長の為に必要経費として中心的な問題としてとりあげない現代世界、現代経済学に対して、宗教的経済学は、それはまさに文明破壊、文明崩壊の過程であると、危機意識をもって批判する。クマラッパにとって、

その最も具体的例は、英国の帝国主義的インド支配であり、インド、特にその農村の貧困化であった。宗教的経済学は超越的核を目指し、核にあることを意図しているので、その意味で永遠の経済学 (Economics of Permanence) であり、その経済学にとって自然と人間との調和、人間相互の平和、社会間の平和は中心的課題であり、その意味で平和の経済学 (Economics of Peace) である。この経済学の視点からは、大規模な機械による大量生産は暴力的であり、自然と人間の破壊を必然的に伴っており、生活水準の向上が意味する消費の増加と消費の多様化は、文明とは無関係であり、無意味である。それは必然的に二重社会、魂と体の糧のない飢えた人々を生み出すであろう。これに対して、宗教的経済学は、地方の必要は地方の資源を活用した地方の生産によって充足することを原則としており、これは地方がそれぞれ経済圏として自立することであり、基調としては最少限の消費で最大の福祉を意図した質素な生活様式であり、非暴力を原則とする。ここでは労働・仕事は、基本的には礼拝であり、人格の浄化と形成を意味し、これこそ文明の本質であり、したがってすべての人が仕事を与えられていることは必須不可欠である。宗教的経済学における経済計画は、すべての人が仕事をもつこと、失業者がいないことを基本的な課題としている。

クマラッパは、インドにおいては農村の再生、農村、或いはいくつかの農村が一つになって自立した経済圏の確立が、インド再生、インド独立の基本的課題、最も重要な課題であることを経済学的にも、そして個人としての体験からも確信し、主張しつづけた。ガンディーもこれを全面的に支持していた。この両者の絶対的信頼に基づいた密接な関係から、クマラッパが、ガンディーの経済的思想を体系化し、実践し、ガンディー経済学者として考えられたことについては、既にくりかえし述べてある。

クマラッパが農村の再生を課題とした理由として次のことがあげられる。

1. 伝統的な生産単位である。
 2. インドには資本の蓄積がない。
 3. 労働力が豊富である。
 4. 市場が限定されている。
 5. 悲惨な貧困の現実がある。
 6. インドは農業国である。
 7. インドの再生は、資本主義、社会主義、共産主義的体制ではなく、永遠、平和の経済学に基づいた農村主義にしか見いだされない。
- 具体的に、これを達成する為の方法として次のことが指摘されている。
1. 土地の私有制度の廃止。村有にすべきである。
 2. 職業の卑賤についての慣習、考えを廃棄すべきである。伝統的に不可触賤民の仕事であった不浄の処理などは、各家庭で責任をもつべきである。
 3. 利益の為ではなく、日常生活の必要・用途の為に生産はなされるべきである。
 4. 仲買人の廃止。
 5. 分配の公正と欠乏と不安定からの自由についての保証。
 6. 経済活動・経済組織の目的を全体の、共通の福祉にすべきである。
 7. 大規模な機械による生産は国有にすべきで、それも農村産業と競争関係のないもの、むしろそれを助長するものに限定するべきである。
 8. 私的大企業の廃止。
 9. 消費を自己の所属する経済単位の生産物に限定。
 10. 自立的、自発的な農業と農村産業の継続的改善。
 11. すべての人に仕事を与えるべきで、教育も仕事に適応出来るような教育をすべきである。

これらは主として経済的側面を要約して列記したのであるが、これに加えて政治的、文化的側面もある。しかしここでは政治的側面の最も重要な点を指摘するにとどめる。それはパンチャヤト (Panchayat) 制度

を通して、農村における民主主義の確立の為に努力することである。村民によって選ばれたパンチャヤトは、農村が経済的自立単位になることを目指して、農村の運営——土地・仕事の配分、財政、共同組合、選挙、公共施設の管理、教育、衛生、健康管理、水道、電気、道路、法の維持等——に責任をもたなければならない。

以上述べたことは、クマラッパの宗教的経済学の基本的枠組みにすぎない。現実には、当然のことではあるがさまざまな問題に直面している。課題に直面しているクマラッパは百獣の王である獅子の面影があるといわれているが、これが単に心理的でないことは、クマラッパが、F. S. A. A. (Fellow of the Society of Incorporated Accountants, London)のメンバーとして大企業の中で1919年から1929年迄働いて、大企業の仕組みを理論的にも实际的にも熟知していたこと、1929年以後の農村調査、農村再生の為に献身的な努力、さらにくりかえされた刑務所生活を通してインドの現実を具体的に知っていること、そして何よりも誰が見てもサンニヤーシといわれるような——恐れを知らない、自由な、ただひたすら真理(神)を目指している、無所有の、神に支えられた——生活態度、生活様式からも明きらかである。敵にまわすと手強いが、味方になると百万の軍隊よりも心強くなるのではなからうか。事実、ガンディー、国民会議派によって依頼された課題を批判の余地がないほどに着実、堅実に為しとげている。しかし農村再生の問題は、きわめて至難であった。それにもかかわらず不退転の姿勢でそれにのぞんでいる。その間の事情を物語るのが、A. I. V. I. A. の機関紙 *Gram Udyog Patrika* であり、本来ならばそれに言及しなければならないのであるが、紙数が制限されているので割愛する。

最後に歴史的想像であるが、もし仮にガンディーが暗殺されなくて少くとも10年さらに生きていれば、その暗殺された時ガンディーは78歳であったけれども、かけつけたガンディーの末子デーヴァダースが遺体にむかって「バープーほどのすばらしい胸をした兵士は一人もいなかった

た」と言ったといわれているが、それほどガンディーは健康に恵まれていたのでその可能性は十分あったが、クマラッパーのような有能な献身的な人々の協力によってインド農村再生運動の一つの突破口が開かれたのではないと思われる。そういう意味でもガンディーの暗殺はインドにとって悲劇であった。

注

この章の骨子は既に言及した Schumacherの *Small is Beautiful*, J. C. Kumaraappa の *Why the Village Movement ?* と *Economy of Permanence* による。

J. C. KUMARAPPA'S RELIGIOUS ECONOMICS

≪ Summary ≫

Minoru Kasai

J. C. Kumarappa (4/1/1892 – 30/1/1960) is a forgotten person in the contemporary India and ignored by scholars of different disciplines.

This paper is a humble effort to bring him back to the memory of history. Examining Gandhi's significance in the modern historical context, it is almost impossible to understand why scholars ignore J. C. Kumarappa. It clearly shows that studies on Gandhi are still to be done. Disappearance of J. C. Kumarappa from historical memory shows a trend of contemporary India: Gandhi is officially and formally accepted as the father of the nation, yet substantially and practically ignored. J. C. Kumarappa was Gandhi's most trusted economist.

This paper is mainly consisting of two parts. The first part is biographical and therefore contextual. In his upbringing, his mother's Christian and practical education was decisive. However, without meeting Gandhi, Kumarappa would have ended up as a successful and prosperous public accountant of F.A.C. for big business in Bombay. Kumarappa's dedication to the cause of uplifting the poor in association with Gandhi and under his leadership was total and radical so that even his opponents could not raise a question regarding his personal integrity. Many were touched and moved by his commitment to reconstruction of villages. Gandhi was one of them.

However, he was in a great conflict not only with the colonial power, but also with the Indian National Congress led and represented by J. Nehru regarding economic policy in particular and power structure inherited from the colonial rule in general. It became known since 1938 and since then he was more and more considered as a Gandhian economist

rather than as a national economist. It was so vividly clear for him that huge industrialization through foreign aid propagated by the Indian National Congress would bring nothing but misery to India: poverty and exploitation of the villages would remain indefinitely. For Kumarappa, economic reconstruction of India was that of villages and it was possible only through self-help within available resources and appropriate technology. His determined dissent from the ruling economic policy was too uncompromising, intolerant and harsh for many of his contemporaries. This may be one of the reasons of his being forgotten.

His another main conflict was with the Anglican Church in India. The Church was officially critical on the national movement led by Gandhi during 1930's and her attitude toward the Independent movement was ambivalent on the whole because of her close association with the colonial rule. Kumarappa, though a dedicated Christian, being in the core of the national movement, had to meet and to respond to the public criticism of the archbishop of the Church. His precious witnesses still remain symbolically in the sculpture of Jesus being taken down from the cross located closely at the entrance of the Udyog Bhavan which was the center of the village construction movement as a vital part of the Independent struggles. Gandhi was deeply moved by his Christian witness. The Udyog Bhavan itself in full of Kumarappa's touch. But he is hardly remembered in the Churches. It is difficult to find even a reference to his name in the history of Indian Churches.

The second part deals with Kumarappa's religious economics which was regarded as a most faithful theoretical reconstruction of Gandhi's economic vision and fully affirmed and supported by Gandhi himself while he was still alive. E. F. Schumacher shares many points in common with Kumarappa and lists the latter's *Economy of Permanence* as one of the main references in the former's *Small is Beautiful*. Schumacher's analysis of the religious economics is very much identical fundamentally with Kumarappa's economics though the latter's specific context was modern India. It is fascinating and amazing to see this affinity though their voices were peripheral in their contemporary scene. This paper gives only an outline of Kumarappa's economics, referring to Schumacher's

Small is Beautiful.

It is indeed painful that such a forerunner like Kumarappa is forgotten. Almost all of his writings except one or two are out of print and not available today. The cost of such forgetting seems to be drifting to disaster without any self understanding.